

『六度集経』第23話とベトナム建国神話

伊藤千賀子

The 23rd tale in *Liudùji jing* and national founding mythology of Vietnam

Ito Chikako

Abstract

This paper is to declare that *the Liudùji jing* was affected by Vietnam where Kāng Sēnghuī (康僧会) was from, comparing the 23rd tale in *the Liudùji jing* (『六度集経』) with other similar tales.

In recent years, it has been considered that *the Liudùji jing* is a simple summing up of short sutras. not finding out any scripture named *the Liudùji jing* regardless of our research on ancient scriptures. But I would like to present that Kāng Sēnghuī added what he needed to tell according to his aim in Buddhism to short sutras.

To understand his reason for it, we have to take a look for Jiāozhī (交趾) society under the Vietnam government when Kāng Sēnghuī grew up. At that time, people had suffered under the despotism of Vietnam government. To save the people from the disaster of political confusion, Kāng Sēnghuī made a decision to make a direct petition to the king of Wú (吳国). When he was 20 years old, Kāng Sēnghuī went to Jiànyè (建業) conventionally to see the king. But Wú that Kāng Sēnghuī saw in front of his eyes was under the terribly rude and brutal government. Then Kāng Sēnghuī realized he had to lead the king to the right way to the ideal governor and made some plan. He not only edited but also gave additional writings to *the Liudùji jing* referred to an ideal statesman under the pretext of translation of Indian scriptures.

In *the Liudùji jing*, Kāng Sēnghuī switched original two motives in a short sutra to another two motives from national founding mythology of Vietnam. The 23rd tale in *the Liudùji jing*, such as “One hundred boys shall be born from one hundred eggs.” “One of the one hundred boys shall be the king.” are picked up from national founding mythology of Vietnam, his mother

land, and are switched from the original motives such as “a daughter, who got a birth from hind as a mother and hermit as a father, bore a water lily with one hundred petals and there were one hundred boys on the petals of water lily.” “One hundred boys shall turn to be a pratyekabuddha (辟支仏).”

Considering of this, it's hardly to say that *the Liudüji jing* is a pure original scripture.⁽¹⁾

キーワード: 康僧会、六度集経、雑宝蔵経、大唐西域記、大方便仏報恩経、*Mahāvastu Avadāna-Kalpalatā*、大越史記全書、建国神話、ベトナム、交趾、鹿女、蓮華、卵生。

1. はじめに
2. 『六度集経』第23話のあらすじ
3. 鹿女夫人の出産
4. 王子たちの行く末
5. ベトナムの建国神話
6. 『雑宝蔵経』と卵生説話
7. 漢訳仏典における卵生説話
8. インド系言語における卵生説話
9. まとめ

1. はじめに

本稿は、『六度集経』第23話を他の類似経典と比較することにより、『六度集経』には康僧会の出身地ベトナムの影響があることを明らかにする。

『六度集経』とは、『大正新脩大蔵経』（以下『大正蔵』）第3巻本縁部の最初におかれているNo. 152の経典。全部で51ページと1段。全8巻。『大正蔵』の目次には(1)から(91)まで番号がふっており、それに沿って91話よりなるといわれている。また経名のように六度に配されている。内容の多くはジャータカやアヴァダーナであるが、精進のなかには仏伝が挿入されていたりもする。『大正蔵』には康僧会訳となっている。

『六度集経』について、フランスのシャヴァンヌは100年以上も前の1910年に『六度集経』は経典名が内容を示唆しているように、もともとは別個の経典として独立していた経典の寄せ集めである。多分すべて、僧会本人が、一方では経典を選び、一方では内容を簡潔にし、『六度集経』を編集した。サンスクリット語で書かれた逐語的な原典が存在するという証拠はない。⁽²⁾とし、すでにサンスクリット語原典の存在を疑っている。日本の研究が同様の結論に達する

までにはかなりの年月が必要であった。

日本では長い間、『出三蔵記集』⁽³⁾や『高僧伝』⁽⁴⁾『開元釈教録』⁽⁵⁾などの記述をもとにインドで作られた原典があり、それを翻訳したものとされてきた。

しかし、シャヴァンヌと同様に、『六度集経』の所伝の多くはすでに翻訳してある小経を集めたものとした日本における最初の記述は〈常盤大定 1938 p. 586〉⁽⁶⁾であろう。さらに進んで〈牧田諦亮 1960〉には「『六度集経』は訳本ではなく、おそらく康僧会自身の著作であろう。」という記述もある。だがこれらの記述は人々の目には止まらなかつたようである。これから20年以上たった〈鎌田茂雄 1982 pp. 220-221〉における、「菩薩の六度について六章がたてられ、各章のなかには多くの経典からの抜粋や、抄経が引用されて構成されている。翻訳経典というよりも一種の抄経である。また小経はそのまま載せているらしい。」という記述あたりから、『六度集経』は原典からの翻訳ではないとされるようになった。

また、『高僧伝』巻1によれば、康僧会の先祖は康居の人であるが、代々インドで生活し、父親は商売のために交趾⁽⁷⁾に移住した。康僧会は10余才で両親が亡くなり、出家し、厳しく修行に励み、性格は高尚、見識は高く、学問を好み、三蔵を明快に理解し、他の学問にも通じ、文才もあった。その後、康僧会は、まだ仏教が行われていない江南に、仏の教えを大きく広めるために呉にやってきて、さまざまな経典を訳出した。康僧会が呉国の首都建業にやってきたのが247年、亡くなったのは呉が滅亡した年の5ヶ月あまり後の280年9月という⁽⁸⁾。筆者は、康僧会が交趾を出立した年を、『唐会要』の「康国の人は20才になると他国へ行」⁽⁹⁾くという記述より、20才の時と推定している。⁽¹⁰⁾

また、建業を選んだ理由は次のようなものと考えている。交趾は中国の植民地であったため、中国からやってきた官吏の多くは住民を搾取して私腹を肥やし、とうぜん統治の仕方もひどく粗暴であった。このため圧政に対してしばしば反乱が起きていた。康僧会が建業にやってきた翌年の248年には大規模な反乱が起きたが、交州刺史⁽¹¹⁾・陸胤がかけつけ6ヶ月の熾烈な戦いの末に鎮圧された。康僧会が国を後にする頃の国内は非常な混乱をきたしていたのである。交趾に赴任した無法な官吏たちを改心させるためには、彼らを派遣した呉王に直接はたらきかけるしかないと考えて、交趾から建業にやってきたと推定している。

ともかく、康僧会は生まれてから20才まで交趾に暮らしていた。したがって、現在のベトナム北部にある交趾の習俗習慣が身につけていたはずである。本稿は、『六度集経』第23話にベトナムの建国神話の2つモチーフがふくまれており、『六度集経』にはベトナムの影響があることを明らかにするものである。

2. 『六度集経』第23話のあらすじ

『六度集経』第23話のあらすじを記す。ストーリーの次第にしたがって①から⑥までの番号をふり、それぞれ次のような題名をつけた。

- ①[大過去物語] ②[鹿女の出生と蓮華の足跡] ③[鹿女の出産] ④[発見]
⑤[親子対面] ⑥[王子たちの行く末]

結合部は省略した。また、主人公の女性は鹿女とよぶこととする。

- ① [大過去物語] 昔、夫子のいない母親は自分の弁当を沙門の鉢にいれ、上に蓮華を一つ置いた。沙門は神通力で光明を放った。母は歓喜し、「来世に100人の子を生み、このような人になってほしい」と願った。
- ② [鹿女の出生と蓮華の足跡] 母が亡くなると、その霊はバラモンの小水の所にとどまった。鹿が小水を舐めて感応し、女子を生んだ。バラモンがこの子を育てた。鹿女が10才あまりの時、油断していて火を絶やしてしまった。鹿女は歩くと一足ごとに蓮華を生じた。火をもらいに行くと、その家の人は住居の周りを3周することを望んだ。
- ③ [鹿女の出産] 家を囲む三重の蓮華が評判となり、王の耳にも入った。王家を繁栄させるという占いの結果もあって、王家に嫁いだ。鹿女は身ごもり、卵100個を生んだ。宮中の女たちは嫉妬して、芭蕉を鬼の形に刻んでこのようなものを出産したと王に見せた。悪人たちは壺に卵を入れて河に流した。
- ④ [発見] 下流の国の王がこの光り輝く壺をひろい、100人の婦人に懷で温めさせると、時満ちて、100人の男子を得た。
- ⑤ [親子対面] 100人の男子は聖人の知恵があり、顔の光は世人を越え、力は人の100倍であった。王はそれぞれに白象を与えて隣国を征服させた。隣国の王が敵を負かす者を募ると、鹿女が名乗り出た。鹿女は物見櫓に登り、自分の乳をつかみ、乳汁を100人の息子の口にまんべんなく放った。息子たちは涙を流して抱きあい、親子ははじめて顔を合わせた。
- ⑥ [王子たちの行く末] 息子たちは世の無常を感じ、親に暇乞いをして、仏道を学び、99人は縁覚のさとりを開いた。1人は国を治め、父亡き後、国王となった。⁽¹²⁾

類話は『六度集経』もふくめて以下の7種になる⁽¹³⁾。基本構造は「仙人と鹿との間に生まれた女子は歩くと蓮の花が咲いた。それが縁で、王妃となり、出産する」である。

『六度集経』23⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

『雑宝蔵経』8「蓮華夫人縁」⁽¹⁶⁾

『雑宝蔵経』 9 「鹿女夫人縁」⁽¹⁷⁾

『大唐西域記』 6 「室羅伐悉底国」⁽¹⁸⁾

『大方便仏報恩経』⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

Mahāvastu III⁽²¹⁾

Avadāna-Kalpalatā II, 68 *Padmāvatyavadānam*⁽²²⁾

『雑宝蔵経』から第8話「蓮華夫人縁」と第9話「鹿女夫人縁」の2説話がある。そっくりな話なのである⁽²³⁾が、第9話の結合部に蓮華夫人という単語がつかわれ、また1000人生まれたはずの子どもが、第8話と同じ500人になってしまっている。あまりにも似た内容なので書いているうちに混同したのであろうか。

さて、それぞれが非常に興味深い内容なのだが、いまここで問題とするのは、③[鹿女の出産]と⑥[王子たちの行く末]である⁽²⁴⁾。

略号は次の通り。

【六】『六度集経』

【宝8】『雑宝蔵経』 8 「蓮華夫人縁」

【宝9】『雑宝蔵経』 9 「鹿女夫人縁」

【西】『大唐西域記』 6 「室羅伐悉底国」

【恩】『大方便仏報恩経』

【Mvu】*Mahāvastu*

【Avk】*Avadāna-Kalpalatā*

3. 鹿女夫人の出産

以下に鹿女が王と出会い出産するまでの各所伝のあらすじを記す。

【六】家を囲む3重の蓮華が評判となり、国王の耳に入った。王は占いの結果も素晴らしかったので、鹿女を王家に迎えた。鹿女は身ごもり、卵100個を生んだ。宮中の女たちは嫉妬して、壺に卵を入れて河に流した⁽²⁵⁾。

【宝8】烏提延王が狩りをしていた時、ある家のまわりに蓮華が7重に咲いているのを見て不思議に思い、跡をたどって仙人の住居に着いた。王は鹿女を後宮の最上の夫人とした。鹿女は500の卵を生んだ。大夫人は卵を小麦粉の団子にすり替えて、卵は箱に入れてガンジス河に投げ捨てた。王は鹿女を位からおろした。

【宝9】獵に出ている梵予国王は梵志の庵の周りがある14周の蓮華と2本の道に2列に蓮華が咲いているのを見た。王は華の跡を尋ねて梵志の家に至り、女

の容姿も態度も整っているのを見て、彼女を第2夫人にした。鹿女は身ごもり、1000枚の花びらをもつ蓮華を生んだ⁽²⁶⁾。大夫人は悪臭を放つ馬の肺と取りかえ、かごにいれて河に捨てた。大夫人は鹿女の職を解いて、再び王にまみえることを許さなかった。

【西】梵予王は狩りに行き、蓮華を見て、その跡をたどって訪ねあて、そのまま鹿女を連れて城へ帰った。月日が満ちて1000枚の花びらをもつ蓮華を生んだ。その花びら1枚1枚に一人の子が座っていた。夫人たちは嫉妬して、不吉であると言い立て、ガンジス河に投げ捨てた。蓮華は波にもまれながら浮かびただよっていった。

【恩】波羅奈王が猟にやってきて窟のまわりを蓮華が取り巻いているのを見て、すぐに南窟へ行き、仙人に会った。王は鹿女を象に乗せて宮殿にもどった。鹿女の父は高山の頂からはるかに鹿女が去るの涙ながらに見ていたが、鹿女は振り返りもしなかった。父は鹿女の親をないがしろにする態度を怒り恨んで「王が鹿女から遠ざかるように」と呪った。王は彼女を第1夫人とし、鹿女夫人と名づけた。鹿女は500枚の花びらをもつ蓮華を生んだ。仙人の呪力が王を怒らせた。王は夫人の職を解き、蓮華を棄てさせた。

【Mvu】【Avk】パドマーヴァディー（蓮華）が水を汲みに出かけた時、ブラフマダッタ王が森へ猟にやってきた。王は彼女が美しく清純で、歩くと足あとに蓮華が咲くのを見た。王は糖菓を彼女に渡し、それを知った父の仙人が二人の婚礼の儀式をとりおこなった。やがて、彼女は妊娠し、2人の男の子を出産した。後宮の女たちは嫉妬し、赤子たちを箱に入れてガンジス河に流した。王には彼女が子どもを食べてしまったと伝えた。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾

バラモンと鹿の間にできた鹿女が出産したものは3種である。卵と蓮華と人間である。【六】と【宝8】がそれぞれ卵を100、500生む設定になっている。この2説話以外のうち3説話が蓮華を生み、その蓮華は500あるいは1000の花弁からなっていて、それらに1人ずつ子どもがいる。【Mvu】【Avk】は、生んだのは最初から人間で、2人の男の子である。

『六度集経』	生卵百枚。 ⁽²⁹⁾ 時満体成、産為百男 ⁽³⁰⁾
『雑宝蔵経』 8 「蓮華夫人縁」	生五百卵。 ⁽³¹⁾ 卵自開敷。中有童子。 ⁽³²⁾
『雑宝蔵経』 9 「鹿女夫人縁」	生千葉蓮華。 ⁽³³⁾ 一葉有一小兒。 ⁽³⁴⁾
『大唐西域記』六「室羅伐悉底国」	生一蓮華。花有千葉。葉坐一子。 ⁽³⁵⁾
『大方便仏報恩経』	生一蓮華。 ⁽³⁶⁾ 有五百葉於一葉下有一童男 ⁽³⁷⁾
<i>Mahāvastu</i>	dvau dārakā (2人の男児) ⁽³⁸⁾
<i>Avadāna-Kalpalatā</i>	bālayugala (男子の双子) ⁽³⁹⁾

4. 王子たちの行く末

つぎに王子たちの素性がわかり、2国が和解してからの⑥[王子たちの行く末]をとりあげる。【西】【Mvs】【Avk】にはこの部分はない。

それぞれの要約を下記にあげる。

【六】子どもたちは、親にいとまごいをし、仏道を学び、99人は、縁覚のさとりを開いた。1人は王となり国を治めた。

【宝8】500人の子どもたちはみな辟支仏となった。2人の王も自然と開悟し、やはり辟支仏となった。

【宝9】500人(マ)の子どもたちはみな辟支仏となった。

【恩】500人の太子は鹿母の「遠くへ行かないで欲しい」という願いを聞きいれて、宮殿の後園で出家修行し、道果を得て、神変をなし、身を焼いて般涅槃に入った。鹿母夫人は彼らの骨を収め、後園のなかに500の塔を立てて供養した。鹿母は「来世は子どもは1人だけでよい」と願った。

【宝8】と【宝9】【恩】の3話は王子全員が辟支仏になっている。【六】のみ、99人が辟支仏になり、残りの1人が国王となった。

5. ベトナムの建国神話

ここでベトナムの正史である『大越史記全書』⁽⁴⁰⁾の建国神話をみてみたい。⁽⁴¹⁾

初、炎帝神農氏三世孫帝明、生帝宜。既而南巡至五嶺，接得嫫女，生王。王聖智聰明，帝明奇之，欲使嗣位。王固讓其兄，不敢奉命。帝明於是立帝宜為嗣，治北北，封王為涇陽王，治南方，號赤鬼國。王娶洞庭君女，曰神龍，生貉龍君。貉龍君娶帝來女，曰嫫姬。生百男（俗傳生百卵），是為百之祖。一日謂姬曰：「我是龍種，爾是僊種。水火相尅，合併實難。」乃與之相別。分五十子從母歸山，五十子從父居南。封其長為雄王，嗣君位。

(初め炎帝神農氏⁽⁴²⁾三代目の子孫である帝明に帝宜が生まれた。その後、中国の南方を巡って五嶺⁽⁴³⁾に到着した。そこで嫫女⁽⁴⁴⁾の女と接し、涇陽王を生む。帝明は、この涇陽王が聖人の智慧をもち、すばらしく聡明なので、帝位を継がせようとした。ところが、王は兄をさしおいて弟である自分が位を嗣ぐことを受け入れず、兄が王位をつぐべきであると主張して、全く命令を聞こうとしなかった。そこで帝明は、兄の宜を跡継ぎとして北方を治めさせめ、弟をを封じて涇陽王となし南方を治めさせた。その南方の国を赤鬼国と名づけた。王は洞庭君の娘である神龍をめとり、貉龍君が生まれた。

この貉龍君が帝來の娘である嫫姬を娶り、百男を生む。世間一般では百卵を生んだと伝えられている。これが百粵^{ひやくえつ}⁽⁴⁵⁾の祖となった。ある日貉龍君は嫫姬に、

「私は龍種で、汝は僊種である。水と火は対立して互いに相い争う。一緒にいることは実に困難である」と言った。そこで二人は別れることとなり、100人の子どものうち、50人は山に帰る母にしたがい、残りの50人は父について南に住居した。その長男を雄王に封じて君主を嗣がした。⁽⁴⁶⁾ (下線は筆者)

下線をひいた部分に「姫姫を娶り、百男を生む。世間では百卵を生んだと伝えられている。」とある。

<古田元夫 1995 pp. 22-23>は、この建国神話を、前半と後半の2つに分け、次のように述べている。

(前半部分は) 中国人とベトナム人の「同祖性」を主張し、ベトナムを基礎づけている。そのうえで、北方およびその支配者に対して、南方とその支配者の同等性を印象づけており、中華世界の論理を示した部分といえるだろう。これに対して後半部分は、火と水など異質なものが交わって、卵やひょうたんなどの胞状のものが生まれ、そこから諸民族の祖先が出てきたという、インドシナ半島に居住する諸民族に広く分布する胞生神話のひとつのタイプであり、ムオン族⁽⁴⁷⁾の国生み神話とも類似していることから、ベトナム人の間での口承伝説を基礎にした話であると考えられている。ここは、「胞を同じくする」という「同胞」の論理と、「水の一族と火の一族」の平地と山地への「住み分け」の論理という、土着的で東南アジア的な論理が示されている部分である。(下線は筆者)

「卵やひょうたんなどの胞状のものが生まれ、そこから諸民族の祖先が出てきたという、インドシナ半島に居住する諸民族に広く分布する胞生神話のひとつのタイプであり」、「土着的で東南アジア的な論理が示されている」のである。

同じく『大越史記全書』には「100人が百粵の祖となった」とある。100人の子どものうち1人が父親の跡をついで国王になったのであるから、残りの99人がベトナム全土にちらばり、さまざまな民族の首長になったことになる。この1人と99人が『六度集経』において、1人が国王になり、99人が辟支仏に形を変えたのではないか。『六度集経』は仏教経典なのであるから、民族の長ではなく、必然的に辟支仏となった。

康僧会はベトナムから建業へやってきた時、かなりの書籍を携えてきたはずである。⁽⁴⁸⁾それがどのような文献であるかは現時点では全く判明していない。しかしながら、自分がついこの間までいたベトナムの建国神話なら、書籍などで確認しなくとも十分知っていたはずである。

また、『六度集経』は呉王に「仏教による理想の政治論を説くものである」⁽⁴⁹⁾

から、王となる者が必要であった。

6. 『雑宝蔵経』と卵生説話

<船山徹 2002 p. 10>の「第2節 経典の編集」で、「『出三蔵記集』以後、経録作成者たちは、偽経や抄経を批判する際、後人が経典に手を加えることを、仏説を乱す行為として手厳しく避難した。しかしその一方で、ある条件のもとでは、経典を編集して別な経典をこしらえることを半ば当然のように認めてもいた。」
「編集の手が加わる傾向の高い文献」として、<船山徹 2010 pp. 269-277>では「翻訳を編輯して作成した経典—漢訳編輯経典」として次の7つのタイプがあげられている。

- I 抄経 抄経とは大きな経典の内容を節略した経典である。
- II 異訳合本 同一経典の異訳を合して一書とした経典。
- III 法数・仏名関連経典 法数や仏名等を羅列するような形式をとる経典。
- IV 譬喩経典 仏陀の前世の因縁譚を説く等のために多く喩え話から成る経典。
- V 戒律儀礼・瞑想法等の実践手引書 仏教の実践における手引書、一種のマニュアル本と言ってよいものとして、特に戒律儀礼（羯磨^{こんま}）と瞑想（禅定、禅観）などの具体的方法を説く文献。
- VI 伝記 「伝」と称される漢訳文献にも中国で編集されたものが少なくない。たとえば北魏の吉迦夜・曇曜共訳と伝えられる『付法蔵因縁伝』[大正蔵2058番]には西晋の安法欽訳と伝えられる『阿育王伝』、鳩摩羅什訳『十誦律』『龍樹菩薩伝』等と同一の文言がみとめられ、それらの文言を転用しながら中国で編輯されたものであることが分かる。

この分類によると、吉迦夜・曇曜共訳という「『雑宝蔵経』はIV譬喩経典⁽⁵⁰⁾の一つであり、中国で編集された経典である。」<宮井里佳 2004 p. 69> また原典も発見されていない。『六度集経』が康僧会の編纂とされる大きな理由のひとつに、原典が発見されていないことがあげられているが、『雑宝蔵経』も同様なことがいえるであろう。

『雑宝蔵経』が編集されたのが472年というから、『六度集経』より200年以上遅れて成立したことになる。また『六度集経』より以前の漢訳経典のなかに多数の卵から人間がかえる話はみあたらない。したがって、この話の大本は『六度集経』にあったのではないだろうか。

7. 漢訳仏典における卵生説話

『大正蔵』の検索機能⁽⁵¹⁾をつかって検索した⁽⁵²⁾。その結果、卵を生まない種類のもの⁽⁵³⁾が複数の卵を生み、それらから人間が生まれてくるという記述は、

卵の数が2ヶから5ヶまでではなく⁽⁵⁴⁾、6ヶで『三国遺事』があった⁽⁵⁵⁾。これは1284年以後の成立で朝鮮の新羅・高句麗・百済の三国の記事や説話などをまとめたもの⁽⁵⁶⁾で、対象とならない。7から9もなく、10ヶと32ヶが『賢愚経』の第65話と第37話とに登場する。その次の卵は500ヶになる。10, 32, 500の順にみていく。

次に『賢愚経』第65話(10ヶ)と第37話(32ヶ)の要約をしめす。

『賢愚経』第65話「蘇曼女十子品」⁽⁵⁷⁾は、前世で仏舎利塔を修理した老婆が、現世で須達長者の末娘となり、修理を手伝った少年10人が10ヶの卵から生まれた。

『賢愚経』第37話「利耆弥七子品」⁽⁵⁸⁾は、前世で塔に香を塗った老婆が、現世で波斯匿王の姪である毘舎利(離)となり、手助けした少年32人が32ヶの卵から生まれる。

10ヶの卵の説話は『賢愚経』にしか見あたらない。32ヶの卵は、『賢愚経』以外は、人間の生まれ方には4種(胎生・卵生・湿生・化生)あるという中の卵生の例としてあがる。その例として必ずあがっているのが、毘舎佉である。かなり流布していて誰もが知っている説話であったためか、文章が短く、「毘舎佉母生三十二卵名為卵生」⁽⁵⁹⁾というような記述となっている。毘舎佉は毘舎利(離)であろう。

『賢愚経』の成立について、『出三蔵記集』『賢愚経』記⁽⁶⁰⁾に次のようにある。

河西⁽⁶¹⁾の沙門釈曇学や威徳など8人の僧がおり、志を同じくして、あちこちを巡り歩き、遠方まで経典を訪ね回り、ホータンの大寺で般遮于瑟会に遇った。般遮于瑟とは、漢の言葉で、「5年に1度、一切の大衆が集まる」という意味である。(経・律・論の)三蔵のそれぞれの学者達が、各々その宝のごとき法を広め、経を説き律を講じ、各々の分担に応じて教えるのである。曇学ら8人は、それぞれの縁のままにわかれて拝聴した。かくて(かれらは)競って西域の言葉を学び、漢の意味でそれらを折衷した。試作を凝らして翻訳し、それぞれが耳にしたところを書き留めた。高昌⁽⁶²⁾に帰ると、集めて一部の経としたが、しばらくしてから砂漠を越えて(その経典を)涼州⁽⁶³⁾にもたらしたのである。(以下は要約とする。)その後、445年河西の釈慧朗がこれらを集大成して『賢愚経』と命名したが、散逸してしまった。この慧朗に従って訳経の集まりに参加していたのが当時14才の沙弥であった釈弘宗だった。505年には84才、京師の天安寺第一の上座になっていた。僧祐は、弘宗の講じるところを書き取って『賢愚経』を再び世に出した。『賢愚経』がこの地にもたらされて70年がたっていた。

以上が『賢愚経』の成立である。西域で8名がばらばらに聞いた講義をあつめ

て一書になした経典である。また14才で参加して70年後の84才の記憶というのはどのようなものだろうか。〈一切経 本縁部七 p. 62〉は「漢訳は2種あり（宋・元・明本と高麗本）、同一訳者に依ったものであるが、品数が69と62で相違がある。」「正しい梵本のあった経典ではないらしいし、それが殊に教化方面に応用されたであろうから他の経典に比して著しく増広、削除はおこなわれたであろう。」としている。

500ヶの卵を生んだという記述は、『雑宝蔵経』第8話以外はすべて卵生の例としてあがる。すべて「般遮羅王妃生五百卵」という簡単なものである。『俱舍論記』『俱舍論疏』『俱舍論頌疏』には簡単なストーリーがあるが、3経典ともほぼ同文。

普通、人間の子どもが一度に生まれるのは1人、たまに2人である。それ以上の人数になった場合、重さや大きさが通常のままだと体が耐えられないと考えて、小さくて軽い卵で誕生としたのではないだろうか。

8. インド系言語における卵生説話

前述したように〈古田元夫 1995 p. 23〉は「卵やひょうたんなどの胞状のものが生まれ、そこから諸民族の祖先が出てきたという、インドシナ半島に居住する諸民族に広く分布する」「土着的で東南アジア的」なものとする。

たくさん卵から人間が生まれる話をインド系の学問をなさる方々にすると、多くが聞いたことがある、読んだことがあるとおっしゃる。ただどなたもそれがどこにあるかは指摘してくださらなかった。

しかしながら、現時点では、インドの言葉で書かれたものの中に、たくさんの卵から人間が生まれたというモチーフは見つかっていない。

ただ、数百のものが一度に出生するというモチーフは『マハーバーラタ』のはじめの方に2ヶ所みうけられた。⁽⁶⁴⁾

① プラジャーパティの娘カドルーが1000個の卵を生み、それらの卵から1000匹の龍がかえった。〈マハーバーラタ 2002 pp. 141-142〉

② ドリタラーシトラと結婚したガンダーリーは堅い肉塊を生んだ。水を注ぐと塊は100個に分かれた。親指の関節ほどの大きさであったが、時とともに大きくなり、次々に男児が生まれた。〈マハーバーラタ 2002 pp. 387-389〉

①は人間が生まれたわけではなく、②は生まれたのは100人の男児であるが、肉塊からであって、卵からではない。

しかしながら、あるということは1ヶ所あればいいのだから簡単であるが、ないというのはなかなか難しいものがある。したがって、今のところは見当たらないとするのが正しいのであろうか。

9. まとめ

以上からわかることは次のようである。

康僧会が育ったベトナムの交趾では横暴な政治が行われていた。政治の混乱から民を救うためには、おおもとの呉王に訴えねばならないと考えて、康僧会は故郷の慣例にならって 20 才の時に建業に赴いた。ところが孫呉はこの上なく粗暴で残虐な政権であった。そのため康僧会は呉王の姿勢を正さねばならないと考え、インドの經典の翻訳だといつわって、理想の為政者を主題とした『六度集経』を自分自身で執筆編纂した。

また、『六度集経』第 2 3 話の 2 つのモチーフ「鹿女が 100 枚の卵を生み、その 100 枚の卵から 100 人の男児が生まれる」「100 人の王子のうち 1 人が国王となる」は、本来は「鹿女が 100 枚の花びらをもつ蓮華を生み、その花弁ひとつひとつに男児がいた」⁽⁶⁵⁾「王子たちはみな辟支仏となった」というものであった。しかし、康僧会はこの 2 つのモチーフを出身地であるベトナムの建国神話の 2 つのモチーフ「姫が 100 枚の卵を生んだ」「長男は君主となった」からヒントを得て、上記のように書き換えた。

これは『六度集経』にベトナムの影響があることと、一語一語を忠実に訳した逐語的な翻訳經典でないことの 1 つの証拠となる。

<引用文献・参考文献>

- <アーサー・F・ライト 1980> 『中国史における仏教』(アーサー・F・ライト、木村隆一・小林俊孝共訳、東京：第三文明社)
- <赤沼智善 1979> 『印度仏教固有名詞辞典』(京都：法蔵館、第 1 版 3 刷)
- <赤沼智善 2011> 『仏教經典史論』新装版(京都：法蔵館、初版：1981)
- <アジア歴史事典 1960> 『アジア歴史事典』(下中邦彦編、第 3 巻、東京：平凡社)
- <綾部恒雄 1992> 『東南アジアの論理と心性』(東京：第一書房)
- <イオンズ・ヴェロニカ 1988> 『インド神話』(酒井傳六訳、東京：青土社、1990) Veronica Ions, *Indian Mythology* (Hamlyn, London, 初版 1967、改訂版 1983)
- <出石誠彦 1973> 『支那神話伝説の研究』増補改訂版(東京：中央公論社、初版：1943)
- <伊東照司 2005> 『ベトナム仏教美術入門』(東京：雄山閣)
- <伊藤清司 1996> 『中国の神話・伝説』(東京：東方書店)
- <伊藤千賀子 2006-1> 『『六度集経』第 8 1 話「常悲菩薩本生」と『般若経』の異相一三十二相八十種好をてがかりとして一』(『印度学仏教学研究』5 4 巻 2 号、東京：日本印度学仏教学会、2006. 3)
- <伊藤千賀子 2006-2> 『『六度集経』第一話「菩薩本生」の展開と変容』(『印度学仏教学研究』5 5 巻 1 号、東京：日本印度学仏教学会、2006. 12)

- <伊藤千賀子 2013> 『六度集経』の成立について——康僧会の動機と目的—— (『印度学仏教学研究』第61巻第2号、東京：日本印度学仏教学会、2013.3)
- <伊藤千賀子 2014> 『六度集経』と他経典とのかかわり——康僧会の経典作成の思考方法—— (『印度学仏教学研究』第62巻第2号、東京：日本印度学仏教学会、2014.3)
- <稲岡誓純 1983-1> 「康僧会の研究」 (『東山学園研究紀要』第28集、京都：東山学園)
- <稲岡誓純 1983-2> 「康僧会について」 (『浄土宗教学院研究所報』5号、京都：浄土宗教学院研究所)
- <稲岡誓純 1984> 「支謙と康僧会」 (『坪井俊映博士頌寿記念：仏教文化論攷』、京都：仏教大学)
- <稲岡誓純 1985> 「中国に於ける仏教の受容 支謙と康僧会」 (『仏教大学仏教文化研究所報』2号、京都：仏教大学、1985.3)
- <伊吹敦 2001> 『禅の歴史』 (京都：法蔵館)
- <岩本裕 1987> 『総合仏教大辞典』上 (京都：法蔵館、)
- <宇井伯寿 1990> 『釈道安研究』 (東京：岩波書店、初版：1956)
- <エーリク・チュルヒャー1995> 『仏教の中国伝来』 (田中純男ほか訳、せりか書房)
- <延恩株 2011> 「新羅の始祖神話と日神信仰の考察—三氏 (朴・昔・金)の始祖説話と娑蘇神母説話を中心に—」 (『桜美林論考「言語文化研究」』、第2号、東京；桜美林大学)
- <横超慧日 1958> 『中国仏教の研究 第1』 (京都：法蔵館)
- <横超慧日 1971> 『中国仏教の研究 第2』 (京都：法蔵館)
- <横超慧日 1979> 『中国仏教の研究 第一』 (京都：法蔵館)
- <大島利一 1950> 「神農と農家者流」 (『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』、京都：東洋史研究会)
- <大脇由紀子 2012> 『古代朝鮮神話の実像』 (東京：新人物往来社)
- <小川文正 2006> 『黄金色に輝く龍大空にかけ昇る—ベトナムの歴史—』 (東京：文芸館)
- <小倉貞男 1997> 『物語ヴェトナムの歴史—1億人のダイナミズム—』中公新書、東京：中央公論社)
- <小野玄妙 1982> 「経典伝訳史」 (『仏書解説大辞典』別巻、東京：大東出版社)
- <加地哲定 1965> 『中国仏教文学研究』 (和歌山：高野山大学文学部中国哲学研究室)
- <加地哲定 1979> 『中国仏教文学研究』 (京都：同朋舎出版)
- <鎌田茂雄 1968> 『中国仏教思想史研究』 (東京：春秋社)
- <鎌田茂雄 1978> 『中国仏教史』 (東京：岩波書店)
- <鎌田茂雄 1982> 『中国仏教史』 第1巻 「初伝期の仏教」 (東京：東京大学出版会)
- <鎌田茂雄 1995> 『仏教伝来』 (東京：講談社)
- <鎌田茂雄 2001> 『新 中国仏教史』 (東京：大東出版社)
- <神塚淑子 2008> 神塚淑子代表『六朝隋唐時代における仏教譬喩経類の受容と道教』 (平成18年度～平成19年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書)
- <川勝義雄 2003> 『魏晉南北朝』 (講談社学術文庫、東京：講談社)
- <川口義照 2000> 『中国仏教における経録研究』 (京都：法蔵館)
- <河野訓 2007> 『中国仏伝研究』 (伊勢：皇學館大学出版部)
- <河野訓 2008> 『中国の仏教受容とその展開』 (伊勢：皇學館大学出版部)

- <川本邦衛 1982> 「文郎国の歴史記述について」(『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』14号、東京：慶應義塾大学、1982.12)
- <川本邦衛 1988> 「海雲関の北と南：2大文明と海道の王国」(『NHK 海のシルクロード』第5巻、東京：日本放送出版協会)
- <川本邦衛 1998> 「ベトナムの漢字文化—伝統と現在」(『国際交流』第20巻2号、通刊78号、東京：国際交流基金)
- <漢語大詞典 2001> 『漢語大詞典』(罗竹凤主编；汉语大词典编辑委员会，上海：汉语大词典编纂处编纂)
- <漢字海 2011> 『全訳 漢字海』第3版(戸川芳郎監修、東京：三省堂)
- <木村清孝 1979> 『中国仏教思想史』(東京：世界聖典刊行教会)
- <金文京 2005> 「三国史の世界 後漢 三国時代」(『中国の歴史』04、東京：講談社)
- <桑原隲蔵 1965> 「東洋文明史論叢」(『桑原隲蔵全集』第2巻、東京：岩波書店)
- <ケネス K.S. チェン 1981> 『仏教と中国社会』(福井文雅、岡本天晴共訳、東京：金花舎)
- <严耀中 2000> 『江南仏教史』(上海：上海人民出版社)
- <広辞苑> 『広辞苑』(第6版、東京：岩波書店、2008)
- <項青 2014> 「東アジアの<卵生神話>の受容考・その一：中国における呑卵型を通じて」(『国語国文学研究』49, pp.45-60, 熊本：熊本大学)
- <高僧伝(1) 2009> 『高僧伝(1)』(慧皎著、吉川忠夫・船山徹訳、東京：岩波文庫)
- <興亡の世界史 2009> 『興亡の世界史』第11巻(青柳正規編、神内秀信編、杉山正明編、福井憲彦編、東京：講談社)
- <国訳一切経 六 1978> 『国訳一切経 印度撰述部 本縁部』第六巻「六度集経」解題(成田昌信、東京：大東出版社、解題：1932、初版：1935)
- <国訳一切経 一 1974> 『国訳一切経 印度撰述部 本縁部』第1巻「雜寶藏経」(岡教達訳、杉本卓洲校訂、東京：大東出版社初版：1935、解題：1931)
- <国訳一切経 1988> 『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部』第1巻「出三藏記集」(林屋友次郎訳、岡部和雄校訂、東京：大東出版社、解題：1988)
- <国立情報学研究所>国立情報学研究所 - デジタル・シルクロード・プロジェクト、『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ (http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/creator/edouard_chavannes.html, ja)
- <小林惣一 1998> 「西域の社会と文化」(『駒澤史学』52、東京：駒沢大学 1998.6)
- <三枝充憲 2005> 「般若経の真理」(『三枝充憲著作集』第4巻、京都：法蔵館)
- <境野黄洋 1935> 『支那仏教精史』(東京：境野黄洋博士遺稿刊行会)
- <もっとベトナム 1995> 『もっと知りたいベトナム』第2版(桜井由躬雄編、東京：弘文堂)
- <三国志> 『正史 三国志』6(陳寿撰、裴松之注、小南一郎訳、ちくま学芸文庫、東京：筑摩書房、1993)
- <『三国志』> 『三国志』(陳寿撰、裴松之注、北京：中華書局、1959)
- <重田勘次郎 1937> 『解説大日本校訂大蔵経』(東京：解説大日本校訂大蔵経発行所)
- <篠田知和基 2008> 『世界動物神話』(東京：八坂書房)

- <釋天常 1998> 「六度集研究」(台北:『中華佛學研究』第2期)
- <白川静 2003> 『中国の神話』(東京:中公文庫)
- <新アジア仏教史 2010> 『新アジア仏教史 10 (朝鮮半島、ベトナム)』(東京:佼成出版社)
- <新・仏典解題事典 1980> (水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四郎責任編集、春秋社)
- <スーキ・ニマの伝記 2008> 『天翔ける祈りの舞 チベット歌舞劇』(三宅伸一郎訳、石山奈津子訳、京都:臨川書店)
- <鈴木敬造 1959> 「中国における仏教受容の一面」(『東方学』第19輯、東方学会、1959.11)
- <諏訪春雄 2005> 『日本王権神話と中国南方神話』(東京:角川書店)
- <世界神話辞典 2001> イヴ・ボンヌフォワ編、金光仁三郎等訳『世界神話事典』(東京:大修館書店)
- <世界神話事典 2005> 大林太良[ほか]編(角川選書375、東京:角川書店)
- <世界大百科事典 1988> 『世界大百科事典』(東京:平凡社)
- <世界地名大事典 1974> 『世界地名大事典』(渡辺光等編集、東京:朝倉書店)
- <世界の洪水伝説 2005> 『世界の洪水伝説 海に浮かぶ文明』(篠田知和基・丸山顯徳編、東京:勉誠出版)
- <大越史記全書 1984> 『大越史記全書:校合本』(上)、(陳荊和編校、東京:東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター)
- <大漢和辞典 2000> 『大漢和辞典』(諸橋轍次、東京:大修館書店、初版:1958)
- <大乘仏教のアジア 2013> (高崎直道監修、『シリーズ大乘仏教』10、東京:春秋社)
- <大乘仏典 1988> 『大乘仏典<中国・日本編>』第4巻「弘明集 広弘明集」(吉川忠夫訳、東京:中央公論社)
- <大乘仏典 1993> 『大乘仏典<中国・日本編>』第3巻「出三蔵記集(抄)」(荒牧典俊訳、東京:中央公論社)
- <大蔵経全解説 1998> 『大蔵経全解説大事典』(鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行編、東京:雄山閣出版)
- <地図 2013> 『地図で訪ねる歴史の舞台:世界』(帝国書院編集部、東京:帝国書院)
- <中国の仏教 1967> 「中国の仏教」(『講座仏教』第4巻、東京:大蔵出版)
- <中国仏教 1980> 『中国仏教』(第1輯、中国仏教協会編、北京:知識出版社、新華書店、)
- <中国仏教研究入門 2006> 『中国仏教研究入門』(岡部和雄・田中良昭編、東京:大蔵出版)
- <中国仏教史辞典 1981> 『中国仏教史辞典』(鎌田茂雄編、東京:東京堂出版)
- <中国歴史地図 2009> 『中国歴史地図』(朴漢濟編著;金秉駿ほか著;吉田光男訳、東京:平凡社)
- <張帆 2007 年以降?> 「康僧会の仏教伝播方式と反思(康僧会の仏教の伝播様式と再考)」(『覚群仏学』玉仏禅寺、(福建省芸術研究院)、出版は引用物件から2007年以降のものと類推される)
- <陳垣 1955> 『中国仏教史籍概論』(西脇常記・村田みお訳、東京:知泉書館、2014。原書:北京:科学出版社)
- <陳洪 2003> 「《六度集経》文本的性質與形態」(『徐州師範大学学报(哲学社会科学版)』第29巻4期、徐州:徐州師範大学)
- <陳彬龢 1929> 『中国仏教小史』(上海:世界書局)

- <塚本善隆 1979> 『中国仏教史』(第1巻、東京：春秋社)
- <津田左右吉 1954> 『シナ仏教の研究』(東京：岩波書店)
- <唐会要 1884> 『唐会要』(王溥撰、江蘇：江蘇書局)
- <東南アジア研究 1999> 『入門東南アジア研究 新版』(上智大学アジア文化研究所編、東京：めこん)
- <東南アジア史 1999> 『東南アジア史 1 (大陸部)』(石井米雄編、桜井由躬雄編、東京：山川出版社)
- <東南アジアの歴史 2003> 『東南アジアの歴史 人・物・文化の交流史』(桐山昇・栗原浩英・根本敬、東京：有斐閣)
- <東洋史辞典 1967> 『東洋史辞典』(改訂増補版、京都大学文学部東洋史研究室編、東京：東京創元新社、初版：1961)
- <湯用彤 1983> 『漢魏両晋南北朝仏教史』上册 (重印再版、北京：中華書局、初版：1938)
- <常盤大定 1973> 『後漢より宋齊に至る訳経総録』(国書刊行会、初版：1938、東京：東方文化研究所東京研究所刊)
- <トニー・アラン 2009> 『世界幻想動物百科—ヴィジュアル版—』(上原ゆうこ訳、東京・原書房)
- <長尾光之 1980> 「中国語訳『雑宝蔵経』の言語」(『福島大学教育学部論集』32号の2、福島：福島大学、pp. 77-89)
- <中島莞爾 1942> 『南方共栄圏の仏教事情』(東京：甲子社書房)
- <中島隆蔵 1997> 『出三蔵記集序巻訳注』(京都：平楽寺書店)
- <中砂明德 2002> 『江南 - 中国文雅の源流』(東京：講談社選書メチエ)
- <日本大百科全書> 『日本大百科全書』(東京：小学館、初版：1986)
- <任継愈 1997> 『中国仏教史』(第一巻、任継愈主編、北京：中国社会科学出版社、初版：1985)
- <任継愈 1992> 『定本中国仏教史1』(任継愈主編、丘山新・小川隆・河野訓・中條道昭訳、東京：柏書房、原本：『中国仏教史』北京：中国社会科学出版社、1985)
- <林伝芳 1979> 『中国仏教史籍要説』上巻 (京都：永田文昌堂、1979)
- <林屋友次郎 1941> 『経録研究』(東京：岩波書店、1941)
- <干潟龍祥 1973> 『印度仏教学の研究』第2巻 (横浜：印度学研究所)
- <干潟龍祥 1978> 『改訂増補版 本生経類の思想史的研究』(東京：山喜房仏書林、1978)
- <引田弘道 2004> 「パドマーヴァティー物語—『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』第68章 和訳—」(『愛知学院大学文学部紀要』第33号、名古屋)
- <平等通昭 1973> 『印度仏教文学の研究』(第2巻、横浜：印度学研究所)
- <フェルナン・コント 2006> 『ラールス世界の神々・神話百科—ヴィジュアル版—』(蔵持不三也訳、東京：原書房)
- <藤巻和宏編 2011> 『聖地と聖人の東西 起源はいかに語られたか』(東京：勉誠出版)
- <仏教史概説 1989> 『仏教史概説 中国篇』(野上俊静・小川貫弑・牧田諦亮・野村耀昌・佐藤達玄、京都：平楽寺書店、第1刷：1968)
- <仏書解説大辞典 2000> 『仏書解説大辞典』(小野玄妙編、東京：大東出版社、1974-1978、縮小版：1999-2000)

- < 仏典解題 1987 > 『仏典解題事典一新・仏典解題事典 第二版一』(水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四郎編、東京：春秋社)
- < ブリタニカ 2008 > 『ブリタニカ国際大百科事典—小項目電子辞書版』(Britannica Japan Co., Ltd./Encyclopaedia Britannica, Inc.)
- < ベトナム > 『起きてから寝るまでベトナム』(インターネット 2014 年 5 月 5 日現在：<http://blogs.yahoo.co.jp/michaeleiji/folder/365576.html?m=lc&p=4>)
- < ベトナムの事典 1999 > (『ベトナムの事典』監修：石井米雄、編集委員：桜井由躬雄・桃木至朗、東京：同朋舎)
- < ベトナムの歴史 2008 > 『ベトナムの歴史—ベトナム中学校歴史教科書一』(今井昭夫監訳、伊藤悦子訳、小川有子訳、坪井未来子訳、ファン・ゴク・リエン監修、東京：明石書店)
- < 本田至成 2012 > 『『雑宝藏経』の研究』(京都：永田文昌堂)
- < マイケル・ジョーダン 1996 > 『世界の神話—主題別事典一』(松浦俊輔他訳、東京：青土社)
- < 前田恵学 1964 > 『原始仏教聖典の成立史的研究』(東京：山喜房仏書林)
- < 前田専学 2001 > 『原始仏教聖典の成立資料』(東京：山喜房仏書林)
- < 牧田諦亮 1960 > 『アジア歴史事典』(東京：平凡社)
- < 牧田諦亨 1981 > 『中国仏教史研究 第一』(東京：大東出版社)
- < 牧田諦亨 1984 > 『中国仏教史研究 第二』(東京：大東出版社)
- < 牧田諦亨 1989 > 『中国仏教史研究 第三』(東京：大東出版社)
- < 松江崇 2010 > 『古漢語疑問賓語詞序変化機制研究』(東京：好文出版)
- < 松村一男 1999 > 『神話学講義』(東京：角川書店)
- < 松村一男 2008 > 『この世界のはじまりの物語』(東京：白水社)
- < 松村恒 2011-1 > 「類書を典拠とする『金言類聚抄』所収話」(『印度学仏教学研究』第 59 卷第 2 号、東京：日本印度学仏教学会、2011. 3)
- < 松村恒 2011-2 > 「『三宝感応要略録』の構成と後続文献のその利用」(『印度学仏教学研究』第 60 卷第 1 号、東京：日本印度学仏教学会、2011. 12)
- < 松本信広 1969 > 『ベトナム民族小史』(東京：岩波新書)
- < マハーヴェーストゥ 2010 > 「ブッダの大いなる物語：梵文『マハーヴェーストゥ』全訳」下(平岡聡、東京：大蔵出版)
- < マハーバーラタ 2000 > 『マハーバーラタ』1 (原典訳、上村勝彦訳、ちくま学芸文庫、東京：筑摩書房)
- < 三品彰英 1971 > 「神話と文化史」(『三品彰英論文集』第 3 卷、東京：平凡社)
- < 三品彰英 1979 > 『三国遺事考証』中(三品彰英 遺撰；村上四男 [ほか]編、東京：塙書房)
- < 道端良秀 1948 > 『中国仏教史』(京都：法藏館、初版 1939)
- < 道端良秀 1979 > 『中国仏教思想史の研究：中国民衆の仏教受容』(京都：平楽寺書店)
- < 宮井里佳 2014 > 「中国仏教における因縁物語集——『金藏論』に引用される『雑宝藏経』について——」(『印度学仏教学研究』第 62 卷第 2 号、通巻第 132 号、東京：日本印度学仏教学会、2014. 3)

- <妙法蓮華經詞典 2001> *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra*, 『妙法蓮華經詞典』 (Seishi Karashima, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (辛嶋静志編、東京: 創価大学・国際仏教学高等研究所))
- <望月信亨 1946> 『仏教經典成立史論』 (京都: 法藏館)
- <森三樹三郎 1944> 「支那古代神話」 (京都: 大雅堂)
- <山崎宏 1981> 『中国仏教・文化史の研究』 (京都: 法藏館)
- <古田元夫 1995> 『ベトナムの世界史: 中華世界から東南アジア世界へ』 (東京: 東京大学出版会)
- <劉繼生 2008> 「山東仏教の成立と変容過程」 (pp. 116-137, 『創価大学通信教育部論集』 1 1、東京: 創価大学、2008. 8)
- <六度集經 1993> (『六度集經』 台北: 新文豐出版有限公司)
- <六度集經 1996> (『六度集經』 梁晓虹积訳、高雄: 仏光文化事業有限公司)
- <六度集經 2001> (『六度集經』 蒲正信注、成都: 巴蜀書社)
- <Arthur F. Wright 1959> *Buddhism in Chinese history* (Stanford, Calif.: Stanford University Press)
- <Charles Willemen 1994> *THE STOREHOUSE OF SUNDRY VALUABLES*, Translated from the Chinese of Kikkāya and Liu Hsiao-piao (Compiled by T' an-yao) (Taishō, Volume 4, Number 203) BDK English Tripiṭaka 10-I, Berkley, Calif.: Numata Center for Buddhist Translation and Research)
- <Ch'en Kenneth Kuan Sheng 1973> *The Chinese transformation of Buddhism* (New Jersey: Princeton University Press, Princeton)
- <Edouard Chavannes 1910> *Cing cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois et traduits en francais par Edouard Chavannes; publiés sous les auspices de la Societesiatique* (Edouard Chavannes, Bibliotheque de l' Institut des hautes etudes chinoises, volume premier, Paris)
- <Erik Zürcher 1972> *The Buddhist conquest of China: The spread and adaptation of Buddhism in early medieval China* (Leiden: Brill, 1972. First published: 1959)
- <Jan Nattier 2008> *A guide to the Earliest Chinese Buddhist Translations: Text from the Eastern Han 東漢 and Three Kingdoms 三國 Periods* (Jan NATTIER, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica X, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University)
- <Karnow Stanley 1997> *Vietnam, a history* (New York: Penguin Books, 初版: 1983)
- <kotobank.jp> <http://kotobank.jp/word/%E4%BA%A4%E8%B6%BE> (2014. 5. 25 現在)
- <Michael C. Williams 1992> *Vietnam at the Crossroads* (London: The Royal Institute of International Affairs)
- <Mvu 英訳 1956> *The Mahāvastu, Volume III*, Translated from Buddhist Sanskrit, by J. J. Jones (London: Luzac: *Sacred books of the Buddhists*; v. 19.)
- <Nguyen Khac Vien 1993> *Vietnam, a long history*, Hanoi: The Gioi Publishers, 初版: 1987)
- <Oscar Chapuis 1995> *A History of Vietnam from Hong Bang to Tu Duc* (Westport, Conn.: Greenwood Press,)

(註)

- (1) 英訳は宮岡多恵子氏のご助力をたまわりました。厚く御礼申し上げます。
- (2) Comme son titre même l'indique, il est un recueil de sûtras primitivement indépendants les uns des autres. C'est, selon toute vraisemblance, Seng-houei lui-même qui composa ce recueil en choisissant les textes et en les élaguant; il n'y a pas lieu de supposer l'existence d'un ouvrage sanscrit dont celui-ci serait la version littéraire. <シャヴァンヌ 1910 Vol.1, p.1>
- (3) 『大正蔵』no. 2145 五五 96a-97a。
- (4) 『大正蔵』no. 2059 五〇325a13-326b13。
- (5) 『大正蔵』no. 2154 五五 653b-654a
- (6) 道安の十法句義經に「昔、嚴調撰十慧章句、康僧会集六度要目」といふ。本經は蓋し抄訳合集したものとなるべきか。
- (7) 現ベトナム北部が交趾と呼ばれるのは、前漢武帝が南越を征服し 9 郡を置いた中に、交趾郡が置かれたのが初見である(前 111)。交趾郡はその後領域に種々の変化はあっても、ほぼ唐初に交州と改められるまで存続する。その後も交趾県の名は唐末まで残る。独立後も中国はベトナムを交趾と呼び、975 年ディン・ボ・リン(丁部領)を交趾郡王に封じたのをはじめ、12 世紀中頃までこの称号が王または王嗣に与えられた。<世界大百科事典 1988>
- (8) 『大正蔵』no. 2059 五〇325a-326b13。『出三蔵記集』卷 1 3「康僧会伝」(『大正蔵』no. 2145 五五 96a-97a) にも同様の伝記がある。翻訳の<高僧伝(一) 2009 pp. 63-82>(慧皎著、吉川忠夫・船山徹訳)を参照。
- (9) 「男子二十即送之他国。」<唐会要 1884 第 2 4 冊 p. 52>第 9 9 卷「康国」の項
- (10) 筆者は<伊藤千賀子 2013>で、康僧会は 20 才の時に交趾から建業にまっすぐやってきたとしたが、これはまだ研究の余地があるようだ。なぜならば、『出三蔵記集』卷 6 に「魏初康会為之(安般守意經をさす)注義」とあり、これが正しければ 2 2 0 年代には三国にいたと考えられるからである。
- (11) 刺史とは長官。
- (12) <神塚淑子 2008 pp. 105-108>を参照。
- (13) 『今昔物語集』天竺部第 5 卷の第 5 話「国王山に入れて鹿を狩り、鹿母夫人を見て妃とせる語」と第 6 話「般沙羅王の五百の卵、初めて父母を知れる語」の 2 話が収録されているが、日本の書籍なので、ここでは問わない。
- (14) 『大正蔵』no. 152 三 14a26-c18。252 年ごろ成立。
- (15) 『経律異相』第 4 5 卷の 2「独母見沙門神足願後生百兒」は『六度集経』と全くの同文。ただし、結合部の「佛告諸沙門」と「菩薩慈惠度無極行布施如是」の 2 文が省略されている。
- (16) 『大正蔵』no. 203 四 452b18-453b23、成立は 2 世紀頃以降。原典は散逸して不明。漢訳は 472 年。<大蔵経解説 p. 59>。
- (17) 『大正蔵』no. 203 四 452b18-453b23。

- (18) 『大正蔵』 no. 2087 五一 908c23-909a19、成立は 645 年。
- (19) 『大正蔵』 no. 156 三 138c21-140c17、AD220 頃<大蔵経解説 p. 42>。
- (20) 構成要素としてみるとインド起源であって、いかにも中国的な要素は何ら認められないけれども、編集の形態からみると、インドに原典が存在したとは到底考えられないような、編集の仕方と無理のある経典<船山徹 2002 p. 18>。
- (21) *Le Mahāvastu*, edited by Emile Senart, Paris, 1897, Meicho-Fukyūkai, 1977, pp. 153-172, 紀元前 1 世紀から紀元 2 世紀までに成立。
- (22) *Avadāna-Kalpalatā of Kṣemendra* (Volume II), edited by Dr. P. L. Vaidya, published by THE MITHILA INSTITUTE of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Darbhanga, 1959, pp. 434-442, 1 1 世紀に成立。
- (23) 『雑宝蔵経』にも、いわゆる「2 話 1 類」の関係があるのか。
- (24) 細かいあらすじについては<平等通昭 1973>にくわしい。
- (25) 鹿が卵を生むというのはかなり不思議なストーリーなのではないか。説話でも、卵を生むのは、鳥類・は虫類・昆虫類などである。最も世界的には太陽が卵を生む説話がかかなりの数にのぼる。
- (26) 【宝 9】【西】【恩】における千葉や五百葉とは「葉」ではなく「花びら」を指す。"a petal" <妙法蓮華経詞典 2001 p. 323>、「指花弁」<漢語大詞典 9 p. 455b(2)>。辛嶋静志先生よりご教示たまわりました。厚く御礼申し上げます。
- (27) 【Mvu】は<マハーヴァストゥ 2010 pp. 279-297><平等通昭 1973 pp. 397-403><Mvu 英訳 1956 pp. 148-167>を参照。【Avk】は<引田弘道 2004>を参照。
- (28) 【Mvu】と【Avk】のあらすじが同一になっているが、【Mvu】は散文、【Avk】は韻文で文章や文体には大きな相違がある。細かく見れば内容も相違するのだが、あらすじとなると同じになってしまう。参考文献をご参照いただきたい。
- (29) 『大正蔵』 no. 15 三 14b13.
- (30) 『大正蔵』 no. 152 三 14b21.
- (31) 『大正蔵』 no. 203 四 452a4.
- (32) 『大正蔵』 no. 203 四 452a12.
- (33) 『大正蔵』 no. 203 四 452c23.
- (34) 『大正蔵』 no. 203 四 452a6、AD646。<大蔵経解説 p. 615>
- (35) 『大正蔵』 no. 2087 五一 909a2-3。
- (36) 『大正蔵』 no. 156 三 139c9。
- (37) 『大正蔵』 no. 156 三 138c19。
- (38) *Le Mahāvastu* p. 163。
- (39) *Avadāna-Kalpalatā* 第 60 偈、p. 438。
- (40) 漢文による編年体のベトナム正史。1 5 巻。1272 年にレー・ヴァン・フウ（黎文休）が『大越史記』を編んだのが最初で内容は南越王趙からリー朝の滅亡まで全 3 0 巻と伝えられるが、原本は失われた。その後、レー朝 1455 年にファン・フー・ティエン（潘孚先）がチャン朝から属明期までの『大越史記統編』

10巻を編修した。さらに史官の呉士連が上記の2書のほか、中国、ベトナム双方の史書などを参考にして、鴻臚氏の建国(B.C, 2888)から黎太祖即位(1428)までを『大越史記全書』とし、1479年に完成した。

<もっとベトナム 1999 p. 191>

(41)現在のベトナム語が作られたのは19世紀のフランス統治下であり、それまでの公式文書は漢文が用いられていた。

(42)【神農】古代伝説中の君主。三皇の1人。母の女登は龍に感じて神農を生みⁱ、人身牛頭であった。はじめて木をけずり、スキなどの農具を作り民に耕作の法を教えたので、神農とよぶ。さらに市場と商業の方法を教え、百草をなめて薬草を定め、医薬の法をはじめたという。したがって後世の農業や医薬の法を説く人々から尊敬される。はじめ陳に都し、のち曲阜に移り、長沙に葬られたと伝えられる。《参考》<森三樹三郎 1994> : <大島利一 1950> <東洋史辞典 1967>

(43)【ウーリン山脈 五嶺山脈】五嶺の名は史記張耳伝に初めて記されているが、交趾(ベトナム)とホーポー(合浦)との間の5つの嶺をいうとの説のほか、華中、華南の境界の山地をさすとする場合にも2つの解釈がある。(略)いずれにせよ、越城嶺を西端とし、それ以東の山地または山越しのルートをさすものである(略)要するに南嶺以南の嶺南の地域との間の障壁または関門という認識のもとに総称されている山地である。山中には松、杉その他広葉樹林が繁茂し、松やに、薬草などを産する。<世界地名大事典 1974 p. 182>

(44)河川の名。婺水。浙江省にある。

(45)中国南部に広く分布した南方系の少数民族およびその国名。(<広辞苑>)

(46)雄王はベトナム最初の国家である文郎国を建てた。<古田元夫 1995 p. 22> 文郎国はハノイから北西約70キロ、現在のフート省のあたりと推定され雄王陵が残り、毎年春祭礼が行われる。雄王は王の名ではなく世襲される際の称号。文郎国は紀元前258年に同じ安陽王に併合、滅ぼされたとされる。<ベトナム>

(47)ベトナム北部の少数民族。アンナン山脈の東斜面に広く分布。人口80万から90万と推定されている。ムオン語はベトナム語と密接な関係があり、ムオン族とソンコイ川デルタのベトナム人はかつては同質的な集団を形成していたが、ベトナム人の漢化により両者の分化が生じたといわれる。<ブリタニカ 2008>

(48)野本覚成先生よりご教示をたまわりました。厚く御礼申し上げます。

(49) <任継愈 1997> <伊藤千賀子 2013>

(50)アヴェアダーナ。

(51)日本印度学仏教会の大正新修大蔵経テキストデータベース (SAT)。

(52)「数字+卵」および「卵+数字」、すなわち「二卵」「卵二」「三卵」「卵三」「四卵」「卵四」という風に検索していった。

(53) 鳥類、爬虫類・魚類などでないもの。

(54)「鶴が2卵を生み、そこから2童子が出現し、阿羅漢となる」というのが『大正蔵』no. 1545 二七626c24-28にある。

(55)『大正蔵』no. 2039 四九 982b21-c19。六伽耶建国神話。光武帝の建武18年3月、洛水で禊ぎの行わ

れた日のこと。一条の紫色の縄が天から垂れ下がってきた。縄の下には紅い縁取りの布に包まれた金の合子があり、中に黄金の卵が6つあった。12日後、6つの卵はみな容貌の立派な童子となり、15日もたつと背丈は9尺にもなった。彼らは即位して、六伽耶の国王となった。〈三品彰英 1979 pp. 310-327〉参照。朝鮮半島には卵から祖先が生ずる話が多い。

(56) 〈大蔵経全解説 1998 pp. 607-608〉。

(57) 『大正蔵』no. 202 四 440c16-441b25。

(58) 『大正蔵』no. 202 四 399a22-402a4。利耆弥とはサンスクリット語 *mrga* の音訳。〈赤沼智善 1979 p. 429〉。

(59) 『仁王般若経疏』(『大正蔵』no. 1707 三三 323c21-22)。

(60) 『大正蔵』no. 2145 五五 67c12-28。

(61) (黄河の西の意) 中国甘肅省の西部、祁連山地と北山山地に挟まれた砂漠・岩石地帯。東西交通の要地で、河西回廊とも称する。灌漑農業が盛んで、オアシスも点在。涼州。甘肅走廊。〈広辞苑〉。

(62) 漢末から西方に移住した漢族が5世紀中葉にトルファン(吐魯番)地方に建てた植民国家。西域における中国文化の中心。唐に滅ぼされた。王家は沮渠(そきょ)氏・闕(かん)氏・麴(きく)氏など。460頃から640。〈広辞苑〉。

(63) 中国甘肅省の中部、武威市一帯の旧名。西域への通路に当たり、漢初には匈奴に所属。五胡十六国の前涼・後涼・北涼の都。〈広辞苑〉。

(64) 恩師原実先生のご教示をたまわりました。厚く御礼申し上げます。

(65) 『六度集経』の[大過去物語の]に「(母親が) 食べるものをすべて沙門の鉢の中に入れ、蓮華を1つ上に置いて供した。(以所食分、盡著鉢中。蓮華一枚、著上貢焉。)」(『大正蔵』no. 152 三 14a29-b1)とある。鹿女の出産するものが蓮華であるという伏線であろう。
